

2021 年度卒業論文（王ゼミ）

現代社会におけるアナログツールの存在意義

-アナログツールへの心理的な執着

琉球大学 国際地域創造学部 経営プログラム

187111B

桃原 茂也

## 目次

### はじめに

### I アナログツールの特徴

### II 現状

### III 主張

### IV 仮説

### V アナログツールに執着する人々

#### 1 関連文献のレビュー

#### 2 ケーススタディによる検証データ

### VI 考察

### VII 結論

## 現代社会におけるアナログ媒体の存在意義

-アナログツールへの心理的な執着

187111B 桃原茂也

### はじめに

私たちが生きる現代では日々様々なものが科学技術などによって便利になってきている。かつては当たり前のように身の回りにあったアナログ媒体あるいはアナログツールの持つ機能が次々とデジタルデバイスに取って代わられてきている。そして、スマートフォンやコンピューターを使って様々な作業をすることが可能になった。時間を確認することや日々の買い物の支払い、地球の裏側にいる人びとと会話をするなど何気ない日常におけることから世界中の人びとに関わる大きなことまで手元のスマートフォンで気軽に行うことができるようになった。

デジタル化が進んだ現代社会では膨大な情報が日々追加、更新され続けている。そこで、情報を得るときに私たちは携帯電話やスマートフォン、コンピューターなどのデジタルデバイスを用いて情報の海から必要な情報だけを取り出すことができる。一昔前では、本や雑誌などのアナログ媒体が情報を得る主な手段であった。情報環境が劇的に変化した中で、必要な情報を得るにはアナログ媒体よりもデジタルデバイスによる検索の方が効率的である。しかし、それにもかかわらず、現在でも多くのアナログ媒体を利用する人々が存在している。私もそのうちの 1 人であり、スマートフォンのデジタル版で購読できる雑誌でも実際に書店まで足を運び紙媒体の雑誌を購入している。

また、現在ではタブレットやコンピューターなどのデジタルデバイスを用いて自由自在に絵を描くことができる。また、何度もやり直しが可能で自分の想像通りの作品が出来るまで修正を繰り返すことができるため、非常に便利であると言えるだろう。デジタルデバイスで絵を描くことができるようになる以前では、キャンパスやスケッチブックにペンや絵の具などのアナログツールを用いて絵を描くことが主流だった。しかし、絵画の製作においても本や雑誌同様に便利なデジタルデバイスではなく、手間を必要とするアナログツールを利用する人々が存在する。

他にも、最新技術を用いたデジタルカメラやスマートフォンによって精度の高い写真を撮影し、即座に保存あるいは削除ができる。加えて撮影したデバイスで写真を見返すことができる。デジタルカメラや、カメラ機能が搭載された携帯電話やスマートフォンなどのデジ

タルデバイスが開発される以前では、フィルムというアナログ媒体を用いてフィルムカメラで写真を撮影することが主流だった。しかし、写真撮影においても本や雑誌、絵画の製作同様に便利なデジタルデバイスではなくアナログツールを用いる人々が存在している。

このように、情報の検索、絵画の製作、写真撮影などの目的を果たすことができるデジタルデバイスが発達し普及している現在においても、過去に主流だったアナログツールを選ぶ若者<sup>1</sup>が存在している。これらの現象は何を意味しているのかを紐解くのが本稿の目的である。

アナログツールへの執着は年配者のノスタルジーだけではないと考える。PRTIMES「若者の消費トレンドに関する調査」(2017)<sup>2</sup>によると、全国の18歳～29歳の男女で「アナログ的な商品やサービスを使って見たいと思いますか」という質問に対して全体の64%が使ってみたいと回答しているという。このデータから、アナログ媒体あるいはアナログツールを好んで利用しようとする若者が3人中約2人存在するということがわかる。若者のアナログへの興味に関して、生まれてからこれまでに多くのデジタルデバイスに囲まれてきた人々にとって、彼らの親世代が若い頃に使っていたアナログツールに対して、周りに使っている人はあまりいないため物珍しさから関心を持つようになった可能性があると思われる。しかし、利便性や効率性という観点からみれば、同じ目的を果たすのにデジタルデバイスが有利であるにも関わらず、若者のアナログツールに執着する要因は、単に物珍しさだけでは説明できないと考える。したがって、本稿の議論の中心を「若者のアナログツールに対する執着は、外部環境からの影響のみならず、利用者の心理にも影響されるのではないだろうか」という仮説の検証に設定した。なお、本論で検討するアナログツールは、本や雑誌などの紙媒体、キャンパスやペンなどの絵を描く際のツール、フィルムなどのアナログ媒体を利用して撮影を行うフィルムカメラといったものに限る。

## 1. アナログツールの特徴

まず、それぞれのアナログツールの特徴を整理する前に全てのアナログツールに共通して見られる特徴を整理する。

ある機能を果たすのに、アナログツールを利用する場合とデジタルデバイスを利用する場合の決定的な違いのひとつに管理の容易さが挙げられるだろう。アナログツールはモノとして物理的に存在しているため、保管するには空間が必要である。そのために管理には多くの手間がかかる。

次に、以下では本稿で扱うそれぞれのアナログ媒体の特徴を整理し、人々がこれらのアナログツールに執着する理由を検討していく。

## 1. 本・雑誌の特徴

情報を獲得する際に、アナログ媒体ではデジタルデバイスに比べて、より多くの身体感覚(五感)を用いる。例えば、紙の質感を感じる触覚や、新しいもしくは古いインクの匂い、古びた紙の独特な匂いを感じる嗅覚が挙げられる。デジタルデバイスで情報を獲得するには必要でない嗅覚を使用することで、過去に触れたアナログ媒体への懐かしさや記憶が、より明確に現れると考えられる。

他に、本に折り目をつけたり線を引いたりすることで自分だけの感動を本や雑誌に残すことができる。そして読み返した際にその痕跡から当時の心情を思い返すことができる。また、古本屋などの中古市場で購入した本や雑誌には前の所有者が残した折り目や線などがある場合があったりする。前の所有者が残した痕跡を頼りに前の所有者の心情を推察することができる。この推察によって本の内容とは異なる楽しみ方が生まれる。

他には、本や雑誌は複数購入することに意味がある場合がある。デジタルデバイスで購入した本や雑誌は電気信号として全て同じものになるが、紙媒体の本や雑誌を複数購入する人がある。その理由の一つに保存用という用途が考えられる。例えばあるタレントの写真集が発売されたとする。デジタルデバイスで同じ写真集を2冊購入する人はほとんど存在しないだろうが、紙媒体においては観賞用と保存用といった2つの用途で同じ写真集を2冊購入する人はしばしば見受けられるだろう。

また、購入した紙媒体の本や雑誌を本棚に並べていくうちに、自分だけのコレクションとなる。そのコレクションによって所有者の趣味や趣向を表すアーカイブの本棚が完成されると考えられる。情報伝達という紙媒体が持つ最も基本的な機能の他、所有する数を増やすことでコレクションになるという派生的な機能も果たすと考えられる。もちろんデジタル媒体においてもコレクションを作ることは可能である。しかし、デジタル媒体におけるコレクションはデバイスの画面上に表紙が並べられて表示されるだけであり、それらは電気信号の集合である。しかしその一方で紙媒体の書籍や雑誌によって構成されたコレクションは、それぞれが異なる厚さや古さによって物理的な差異が生まれる。そして実際にそれらを手にとることで、その差異を確認することができる。これがデジタル媒体にはない紙媒体特有の楽しみ方の一つである。

紙媒体が持つ特徴は他にもある。以下ではサックス(2018)を中心に紹介しよう。桃原(2022)によれば、「紙媒体には私たちが頭で思い浮かべたことをすぐに自由に書き留めることができ、電源を入れて起動を待つ必要もなければバージョンや細かな書式を設定する必要もないという特徴がある。バージョンや書式設定が必要ないため物理的に消滅することがない限り先の未来においても読むことができる」<sup>3</sup>ということである。

また、「アナログ媒体はデジタル媒体よりも長い歴史を持っているため、その長い歴史における過去に偉人や文豪が同じノートを使用していたというブランドイメージが確立されて、

レガシー（後世に残る業績・伝統）が構築されていく」<sup>4</sup>という。さらにはそのような「レガシーから技術的には「時代遅れ」であっても「クール」であるという印象が生まれる」<sup>5</sup>という。

## 2. キャンパスやペンによる絵画製作の特徴

絵画を制作する際に、キャンパスやペン、スプレー缶などのアナログツールを用いると、一度キャンパスや壁にペンやスプレー缶で描きおろすと、元の状態に戻すことができない。そのため従来のイラストや絵画が完成するまでのすべての工程が一度きりの作業であり、人の手によって完成されるため、製作者はより慎重に描こうと意識すると考えられる。

また、紙やペンによって描いている感覚が異なり、デジタルデバイスでは感じられない感覚があるだろう。

## 3. フィルムカメラの特徴

フィルムカメラはレンズを通して景色をフィルムの感光体に投影するという仕組みになっている。そしてフィルムの感光体は光に反応するため完全に遮光された状態でないと映像の保存ができない。そのため、フィルムを用いて撮影する場合、撮影をしている間での写真の削除が不可能である。また、撮影した内容は現像という処理が完了するまで確認することができない。

また、撮影の際にシャッタースピードや撮影モードなどの設定といった様々な工程を経て撮影方法を決定する。

撮影者がシャッターを押すと全ての写真が保存されるため、撮影した写真を見比べるとありのままの撮影者のアーカイブが完成する。

フィルムカメラのフィルムを製造するフェッラーニア社のバルディーニ氏によると、「日々の写真を撮るのには iPhone が最適だが、フィルムカメラはあくまで一つの選択肢であり、それを選んだ人々はアナログのプロセスとその仕上がりを愛している。アナログツールを用いる方が工程において創造性を必要とし、フィルムはクリエイティブなツールとして存続するだろう」という。

また、サククス(2018)<sup>6</sup>によるとデジタル媒体だと完全に被写体を再現できるが、常に全員がそれを求めている訳ではなく、アナログ写真を撮影する若い世代の人々はアナログフィルムの予測のつかない仕上がりをデジタルにはない特徴と捉えてフィルム特有の欠陥をデジタル写真のアンチテーゼとしたという。

それぞれのアナログツールの特徴を整理する事で、それぞれのデジタル媒体との相違点

や機能、利用者が感じる感情などがわかるだろう。以下では、実際にデジタル社会においてアナログツールが直面している現状を整理し、アナログツールが淘汰されつつある現状を把握する。

## II. 現状

ここで、本稿で検討するそれぞれのアナログ媒体が淘汰されつつある現状について整理する。

雑誌に関して、インターネットサイト「magazine-deta.com」によると男性誌「Samurai Magazine（サムライマガジン）」が2014年5月号で休刊<sup>7</sup>、男性誌「WOOFIN'（ウーフィン）」が2017年2月号で休刊<sup>8</sup>となり、いずれも未だに再開されていない。また、男性誌「Ollie（オーリー）」は2020年3月号で休刊となったが、2020年12月号で復刊<sup>9</sup>していて、休刊前と復刊してから2021年3月号までは月刊発行されていたが、それ以降はシーズンごとで分けられて発刊されていて、現在では1年間に2冊出版されている。これら以外にも休刊あるいは廃刊となった雑誌が存在する。

絵画の製作に関して、株式会社 MUGENUP(2019)「イラストレーター白書 2019」<sup>10</sup>の調査によれば、特にデジタル機材は使わず、アナログ画材を用いるイラストレーターはプロとアマチュアの全体で7.0%であるという。この調査は複数回答であり、デスクトップパソコンとメインモニターを使用しているイラストレーターは全体で53.1%である。また、板型タブレットを使用しているイラストレーターは全体で55.7%であり、ノートパソコンが55.7%、液晶タブレットが29.0%であるという。この調査から、絵画の製作におけるアナログツールの使用はデジタルツールのそれに比べて、非常に少ないことがわかる。

フィルムカメラに関して、一般社団法人カメラ映像機器工業会/CIPA（2020）出荷実績&見通し<sup>11</sup>によると、フィルムカメラの市場規模は1979年～2000年までは3000～4000億円の間で推移していたが、2001年以降は年々減少して2006年には約100億円前後にまで縮小していることがわかる。

このように、デジタルデバイスが出現して以降現在に至るまで急速にデジタルデバイスが普及し、我々の日常生活においてかつて主流だったアナログツールは逆に目にされる機会が減少していった。そして、ファッション雑誌の廃刊やフィルムの減産などからも分かるように物理的に減少していった例もある。しかし、1度休刊になった雑誌の復刊や、減産しているがある程度フィルムが生産されていることは事実であり、アナログツールやアナログ媒体を利用・購入している人々は存在する。デジタルツールに取って代わられてアナログツールが消滅の危機に瀕しながら、それを利用する人々の心理はどのように働いているだろうか。それについて私なりに検討し、仮説を立てて説明する。

### III. 主張

仮説を説明する前に、まず本稿の主張を示し、本稿で扱うアナログツールに共通して見られる特徴を整理する。

本稿は、以前のようにアナログツールが日常の存在としての地位を取り戻し、人類は手間のかかるツールを中心とした生活を送ろうと主張したいわけではない。むしろ、アナログかデジタルかの二者択一ではなく、双方に良いところを見出してアナログとデジタルの共存を実現したいと考えている。なぜなら、ある行為において必ずしもアナログツールあるいはデジタルデバイスのどちらか一方を利用する必要性はなく、淘汰されつつあるアナログツールに執着するだけのアナログツール特有の心理的な要因があると考えられるからである。

### IV. 仮説

アナログツールに執着する人々は、「2.アナログツールの特徴」で挙げたようなアナログツールでしか感じることでできない機能に愛着を感じていると考える。

#### (1) 紙媒体で発行された書籍や雑誌について

本や雑誌などの紙媒体に執着する理由として以下の仮説を立てる。

仮説 1. 紙媒体を収集することで得られるコレクションとしての機能のため。

仮説 2. 紙媒体が発するインクや紙の匂いに特別な感情を持つため。

仮説 3. 紙媒体が本来持っている機能とは異なった二次的な楽しみ方のため。

全巻を並べると背表紙が意味を表す絵になっているマンガのように本や雑誌を並べてコレクションとすることで本や雑誌を購入する人々がいるのではないだろうか。

他には、インクや紙の特徴的な匂いに愛着を感じて紙媒体を購入している人もいないだろうか。

他には、古本屋などで本を二次市場で購入し、本の内容だけでなく前の所有者の痕跡から心情を読み取ろうと考えて紙媒体を購入しているのではないだろうか。

#### (2) キャンパスやペンなどによる絵画の製作について

絵画の製作を行う際にキャンパスやペン、スプレー缶などのアナログツールに執着する理由として以下の仮説を立てる。

仮説 4. 一度キャンパスにペンをおくと修正ができないため慎重に描こうという思いのため



め。作品を完成させる過程で手間をかけることに対して前向きであり、過程にこだわるからこそアナログツールを使用しているのではないだろうか。

### (3) フィルムカメラについて

フィルムカメラに執着する理由として以下の仮説を立てる。

仮説 5. 撮影した写真が完成するのに必要な様々な工程のため。

仮説 6. 撮影の成功や失敗にかかわらず撮影者がこだわった過程に対する成果物への愛着のため。

それぞれのアナログツールにおける執着の理由は細かく異なるが共通して考えられることは、過程を重要視していて完成までの過程においてデジタルデバイスよりも手間や時間がかかるが、そこに時間をかけることで出来上がる完成品に特別な感情や愛着に生まれるということである。

## V. アナログツールに執着する人びと

### 1. 関連文献のレビュー

■大平健 (1990) 『豊かさの精神病理』<sup>12)</sup>における 2 つの事例

1 つ目の事例は、ファッションに敏感なサラリーマンが、付き合っている彼女との経済格差から生まれる劣等感によって、彼女の父親が持っている高価なモノと同じブランドのモノを購入するが、それでも劣等感を払拭できずに体調を崩すというケースである。

2 つ目の事例は、持ち物によって自分の価値が決定すると考えていて、本物のモノや高価なモノを所有することで自分を肯定しているケースである。

これらの事例から、人々がこだわりを持ってモノを所有する際には、その対象物に本人が何らかの価値観や意味を付与していて、それらがきっかけとなって彼らの気持ちを上げたり下げたりすることがあるということがわかる。

### 2. ケーススタディによる検証データ

ここでは作為的に選び出したアナログ媒体に執着していると考えられる人々に実際にアンケートを回答してもらい、彼らのアナログ媒体への執着の事例を示す。なお、アンケートに回答してもらったサンプルそれぞれのプライバシーを守るため、順番に A さん、B さん、C さんと表記する。

A さん<sup>13</sup>のケース

雑誌収集を趣味としている A さんにインタビューした。

まず、「スマートフォンやタブレットなどのデジタルデバイスでも購入することのできる本や雑誌を紙媒体で購入する理由はなんですか。」という質問に対して A さんは「紙媒体で購入することでモノとして残すことができ、実際に手に触れることで製作物を肌で感じる気持ちになれるからです。私が幼い頃はデジタル機器がほとんど普及していなく、本や雑誌を紙媒体で購入していたのでそもそも紙媒体を購入することは自然なことでした。現在ではレコードやたまに CD も盤で買うことがあるので手に取れる製作物として認識しています。」と回答した。

次に、「デジタルデバイスにはない、アナログ媒体で本や雑誌を購入することにおける魅力や、優れていると感じる点がありますか。」という質問に対して A さんは「文字や写真がある程度時間をかけて製作される製作物として肌で感じるができることや、収集癖のある私にとってはモノを残すということに魅力を感じていて、雑誌に関してはコレクションしているという感覚です。雑誌の内容や写真の鮮明さを重視するというよりは好きな雑誌を集めている時間に幸福感を感じます。友達が作った曲を CD として残したいと思っているし、たまにジャケット買いをするレコードも、買って集めている時が楽しいです。また、私は雑誌を丁寧に保管するというよりは乱雑に重ねてしまうので、ふと読み返したいと思った雑誌を探している時間も欲しいものをディグっている<sup>14</sup>感じがして楽しいです。これもレコードショップでの楽しみ方と似ています。」と回答した。

次に、「デジタルデバイスと比べてアナログ媒体で本を購入することにおいて劣っていると思う点がありますか。」という質問に対して A さんは「保管の場所をとります。私は保管するときに乱雑に重ねてしまうので、よりスペースをとってしまいそこは不便に感じます。あと、濡れてしまったらボロボロになってしまうのも不便です。破れたり汚れたりするのは少し嫌です。」と回答した。

最後に、「本や雑誌を購入する際にアナログ媒体で購入するときとデジタルデバイスで購入するときの心情や思い入れの違いはありますか。」という質問に対して A さんは「雑誌は収集を主な目的で購入しているのでアナログ媒体で購入するときは幸福感を感じています。また、デジタル媒体では小説やビジネス書を購入することがありますがそれらは内容に興味を持って購入しています。飛行機に乗る前に紙媒体を購入することもあります。それも内容重視でフライトの間の時間つぶしとして購入しているので、雑誌を紙媒体で購入するとき以外にはワクワク感などの特別な心情は感じていません。雑誌の系統は私の趣味で買っているので好きなカルチャーを知るのに収集という趣味を合わせているという感じですか。」と回答した。

## B さん<sup>15</sup>のケース

キャンパスやスケッチブックにペンを用いてイラストを描いている画家である B さんにインタビューした。

まず、「タブレットやコンピューターのようなデジタルデバイスで絵を描くことができますが、キャンパスやペンなどのアナログツールで絵を描く理由はなんですか。」という質問に対して B さんは「デジタルで描くといくらでも修正が効くのでいいと思うが、アナログは一度インクを落としてミスをするると修正がしにくい。だからこそ慎重に思いを込めて描けるし、その思いが伝わると思う。また、私が幼稚園児の時に親が鉛筆と紙さえ与えておけば黙々と絵を描くことに集中して子守が楽だったというくらい幼い頃から絵を描くことが好きでその時から慣れ親しんでいるアナログツールが私には合っていると感じる。」と回答した。

次に、「デジタルデバイスには無い、アナログツールで絵を描くことにおける魅力や、優れていると感じる点がありますか。」という質問に対して B さんは「人間本来の独特な筆圧や繊細な動きを表現できると思う。私は筆圧が非常に強く、絵や字を描いて（書いて）いる時にペンや鉛筆の動きが紙に伝わる力が強く、その感覚をより強く感じます。その感覚が描いているという意識を生み出し、その意識が心地よい。逆にいえばプリクラの落書き機能のようにタッチペンでディスプレイに描く感じが苦手な違和感を覚える。」と回答した。

次に、「デジタルデバイスと比べてアナログツールで絵を描くことにおいて劣っていると思う点がありますか。」という質問に対して B さんは「修正がしにくいという点と、一度描き下ろした物をデータ化しないといけないという手間だ。紙とペンで絵を描いているためクライアントとのやりとりは一度紙に描いた絵をデータ化してメールなどで送っているが、そのやりとりのためにいくつかの工程を経て作品が届くため面倒だと感じる時がある。また、下描きで了承をもらい作品として出来上がって初めて実物を見せると仕上がりがクライアントの想像と違ったという理由で描き直した経験があり、このような場合でも報酬は増加しないため実働に報酬が見合わないことがある。」と回答した。

最後に、「絵を描く際にデジタルデバイスで描く際とアナログツールで描く際の心情や思い入れの違いはありますか。」という質問に対して B さんは「デジタルはクライアントとのやりとりをスムーズに行うことができ、委託の際に不便なく話が進むから便利であると感じる。作品の暖かみを感じられて描く過程においても紙とペンの感覚を感じられるからアナログの方が思いを込めることができる。また、筆圧が強い私にとって、腱鞘炎になりながら完成させた絵には多くの苦勞を感じるしその分作品に愛着がわく。その思いがクライアントに伝わって共有できた時にアナログで絵を描いていて良かったと感じる。私は電子メールと手紙の違いによく似ていると思う。指先のフリックだけで完成されるメールと書く人の手によって完成される手紙の文章とでは、後者の方が思いを伝えることができるだろうし、実際に心を込めて文章を作成するときは手紙が多いだろう。」と回答した。

### Cさん<sup>16</sup>のケース

フィルムカメラを用いて写真撮影を行うCさんにインタビューを行った。

まず、「デジタルデバイスでも写真を撮影することができますが、フィルムカメラなどのアナログツールで写真を撮る理由は何ですか。」という質問に対してCさんは「スマートフォンで何気なく撮っていた写真を友人に見せたら良い反応が返ってきて自分には写真を撮るセンスがあるかもしれないという勘違いをした。そのタイミングでたまたまフィルムカメラを譲り受けたのがきっかけです。カメラには多くの技術が搭載されていて、私が出会う景色は私以外の誰かがつくりだしたもので、私はただその景色をカメラに収めるという選択をしているだけで、そのための手段はデジタルもアナログも利用する。デジタルデバイスは生活に馴染んでいてメモ感覚で利用している。例えば、今度ここで綺麗な写真を撮りたいと思ったら記録用でサクッと撮ります。ただ、フィルムカメラで撮影するときは三脚を設置して最適なモードに設定してベストな状況を待つなど様々な過程があって撮影します。私は撮りたいと思ったときの感情を大事にして出会った景色を残したいと考えていて、フィルムカメラには私が思うだけの作業が必要なのでフィルムカメラでも撮影します。」と回答した。

次に、「デジタルデバイスには無い、フィルムカメラなどのアナログツールで写真を撮影することにおける魅力や優れていると感じる点はありますか。」という質問に対してCさんは「最初の質問で答えたことに加えて、フィルムカメラで撮った写真はその場で確認することができず、現像が完了するまでの間も私の生活は続いていて良いことや悪いことが起こります。撮影したときの私のテンションと現像が完了して仕上がりを見たときの私のそれは必ずしも一緒ではなく、生活があって心情の変化がありその違いを楽しんでいます。フィルムでしか表現できない雰囲気にも魅力を感じます。デジタルで撮って加工をすればいいと言う人もいますが、加工するくらいなら私は最初からフィルムカメラで撮ります。」と回答した。

次に、「デジタルデバイスには無い、アナログツールで写真を撮影することにおいて劣っていると感じることはありますか。」という質問に対してCさんは「お金がかかります。フィルム代や現像代など。また、私は同じ景色を何度も撮ることを避けているが、納得するまで撮る人にとっては、多くの枚数を撮ることができないという機能性は不便だろうと思います。」と回答した。

最後に、「デジタルデバイスで写真を撮影する際とアナログツールで写真を撮る際の心情や思い入れの違いはありますか。」という質問に対してCさんは「デジタルはメモ感覚です。強い思い入れはあまりなく、瞬きをしているような感じが多いです。撮っているという意識はなく、ただ残していることが多いと感じます。アナログは多くの工程が必要で私の性格上そのような作業が性に合っていて、フィルムカメラで撮影するときは気合が入り真剣に撮影しようと集中できます。私にとってカメラは遊び道具で、景色が遊ぶ友達で、私と友達で道具を使って遊ぶという感覚であり、良いと感じたらフィルムカメラで真剣に撮影をして

遊ぶという感じです。遊んでいて完成した作品から誰かに何かを与えられたら良いなと思います。」と回答した。

## VI. 考察

### 1. 仮説と検証の照合

IV で設定した仮説と検証を比べて以下のようなことが言えるだろう。

まず仮説 1 に関して、本や雑誌などの紙媒体にコレクションとしての要素があり、A さんの回答からそれがアナログツールに執着している理由のひとつとなっていることがわかった。

次に仮説 2 に関して、紙媒体が発するインクや紙の匂いに特別な感情を持つことは A さんの回答からは確認できなかった。次に仮説 3 に関して、紙媒体が本来持っている機能とは異なった二次的な楽しみ方は A さんの回答からは確認できなかった。

次に仮説 4 に関して、一度キャンパスにペンをおくと修正ができないため慎重に描こうという思いは B さんの回答からアナログツールに執着する理由のひとつになっていることがわかった。

次に仮説 5 に関して、撮影した写真が完成するのに必要な様々な工程は C さんの回答からアナログツールに執着する理由のひとつになっていることがわかった。

最後に仮説 6 に関して、撮影の成功や失敗にかかわらず撮影者がこだわった過程に対する成果物への愛着は C さんへのインタビューでは確認できなかった。

本稿で扱うアナログツールに執着する仮説で述べたこと以外の理由として、A の回答から、一見面倒と思われる過程や工程に魅力を感じ執着していることがわかった。

加えて、B さんの「思いがクライアントに伝わった時にアナログで絵を描いていて良かったと感じる。」という回答から、過程だけでなく作品が完成した後にもアナログツールに執着する理由があることがわかった。

### 2. 今後の課題

一連の検証を通して、インタビューを行ったサンプル数が少なくあくまで個人の意見になってしまい、データとして十分な説得力を持たせることができなかったのではないかと感じている。加えて、質問の内容に関して、回答内容が他の質問に対する回答と重複する箇所が見られたため、質問内容と質問の順序にさらなる工夫が必要だと感じた。

アナログツールに執着する心理的な理由を明らかにするには、より多くのアナログツ

ルに執着している人々へのインタビューを行うことが必要だと考える。

## VII. 結論

本稿の目的は、デジタルデバイスが発達し普及している現在において、過去に主流だったアナログツールを使用する若者が存在するという現象を心理的な観点から考察しケーススタディを通して検証することであった。仮説の検証から、アナログツールに執着する様々な心理的要因が明らかになった。これからデジタルデバイスが発展、普及していくことで、現在よりさらにアナログツールの持つ機能が取って代わられていくことが予想される。しかし、本稿の主張でも述べたようにデジタルデバイスとアナログツールの共存をはかることが重要である。便利を追求するデジタルデバイスが増加する世界においてもデジタルデバイスにはない魅力を持つアナログツールに存在意義を見出すことが、私たちアナログツールに執着する人々に求められるのではないだろうか。

---

<sup>1</sup> 育った環境においてデジタルデバイスに触れる機会があった人々とする

<sup>2</sup> PRTIMES 「若者の消費トレンドに関する調査」(2017)資料  
<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000070.000003149.html> (2022.01.29 閲覧)

<sup>3</sup> デイビッド・サックス (2018) 『アナログの逆襲』 pp.76-77

<sup>4</sup> 同上 p.81

<sup>5</sup> 同上 p.87

<sup>6</sup> 同上 p.124

<sup>7</sup> インターネットサイト「magazine-deta.com ファッション雑誌ガイド Samurai Magazine 豆知識/読者層/その他」より <https://www.magazine-data.com/magazine/samurai.html> (2022.01.26 閲覧)

<sup>8</sup> 同上「magazine-deta.com ファッション雑誌ガイド WOOFIN' 豆知識/読者層/その他」より <https://www.magazine-data.com/magazine/woofin.html> (2021.01.26 閲覧)

<sup>9</sup> 同上「magazine-deta.com ファッション雑誌ガイド Ollie 豆知識/読者層/その他」より <https://www.magazine-data.com/magazine/ollie.html> (2021.01/26 閲覧)

<sup>10</sup> 株式会社 MUGENUP(2019)「イラストレーター白書 2019」資料  
<https://mugenup.com/wp-content/uploads/2020/01/8cd93b9c8dd7c2d5d7401440b7568642.pdf> (2021.01.29 閲覧)

<sup>11</sup> 一般社団法人カメラ映像機器工業会/CIPA (2020)「出荷実績&見通し」資料  
<https://www.cipa.jp/stats/documents/common/cr1000.pdf> (2021.01.26 閲覧)

- <sup>12</sup> 大平健著『豊かさの精神病理』は 1990 年に出版された。当時はデジタル化が進んでいなかったため、必然的にアナログ的なモノを指すこととなる。本稿ではデジタル社会を前提に議論を展開しているため環境に差異が存在するが、モノに対する心理的なアプローチとして捉えている。
- <sup>13</sup> 年間 10~20 冊の本や雑誌などの紙媒体を購入していて、紙媒体の所有冊数は 100~150 冊である。20 代男性。
- <sup>14</sup> 情報を探す、発見するという意
- <sup>15</sup> データ化以外の作業をペンや紙などのアナログツールを用いて絵画を製作している。20 代男性。
- <sup>16</sup> フィルムカメラによる撮影を始めて 4 年、フィルムカメラで 2 万枚前後の写真を撮影している。使用機材は Pentax67、Nikon F4、Contax G2、GR 3 などである。20 代男性。

#### 参考文献

1. デイビッド・サックス(2018)『アナログの逆襲』
2. 大平健(1990)『豊かさの精神病理』